あ

明日のこと
おまかせしよう
神さまに

い

祈ろうよ
大事なことを
決める前

う

うそつきは
いつわり王の子
悪魔の子

え

笑顔から
悪魔スタコラ
にげていく

お

オラトリオ
「アヴェ・マリア」から
始まった

か

母さんの
名前はマンマ・
マルゲリータ

き

君たちの
ために使うよ
この命

く

グリージョは
今夜もボスコ
守ってる

け

謙遜で
強く、たくましく
なりなさい

こ

子どもらに
伝わるように
愛しなさい

す

捨てなさい
我は我はと
いう心

た

大変だ
栗がもうすぐ
なくなるぞ

キリトリ

さ

さあ行こう
愛の行い
しに行こう

せ

聖人に
なること神さま
望んでる

ち

忠告は
皆の前では
しないよう

し

幸せは
小さな努め
果たすこと

そ

空の星
いったいだれが
造ったの

つ

綱渡り
マジックみんなで
見においで

て

天国で
一人ひとりを
待ってます

に

ニエンテ・
ティ・トゥルビ
心配ない

の

野原行く
もどるよ必ず
少年院

キリトリ

と

飛び跳ねて
はしゃいで
友情深めます

ぬ

盗むかと
心配しないで
信じよう

は

話そうよ
ほらもうすぐに
友達さ

な

何になる
口先だけの
説教は

ね

ねたまない
うらみもしません
ゆるしましょう

ひ

ひとりじゃない
イエスがいつも
そばにいる

ふ

ファッチョ・イオ
わたしがやります
今すぐに

ま

マザレロと
一緒に作った
FMA※

※サレジアン・シスターズのこと

め

メモしよう
失敗のりこえ
学ぶため

キリトリ

へ

ベッキ村
ジョヴァンニ・ボスコの
生まれ故郷

み

ミケーレ・ルア
僕たち二人で
半分こ

も

モリアルド
カロッソ神父と
過ごした地

ほ

ボナノッテ
短い話を
寝る前に

む

無理にとは
言わないけれど
ぜひ君に

や

約束するよ
パンと仕事と
天国を

ゆ

勇気出せ
希望が君に
味方する

り

理解して
納得してから
行動に

ろ

ローマから
愛する子らに
手紙出す

キリトリ

よ

よろこびは
神と仲良く
いればこそ

る

ルビーより
輝く衣を
着た婦人

わ

若者よ
心の底から
愛します

ら

乱暴な
子は やさしさで
子羊に

れ

霊魂を
与えてよ ほかは
取り去って

を

ロザリオを
教えてくれた
おかあさん

あ　明日のこと　おまかせしよう　神さまに
（『ドン・ボスコのことば 100』p104-105、『ドン・ボスコ自叙伝』p259）

ある晩、ドン・ボスコと母マルゲリータの住む家にずぶ濡れの少年が現れ、一晩泊めてほしいと言う。以前に泊めた少年たちが毛布を持ち逃げしたことがあったので、母マルゲリータは少し迷ってから、「明日はどうなるかわからないけれど、とにかく泊めてあげよう」と決意した。

い　祈ろうよ　大事なことを　決める前
（『若者を育てるドン・ボスコのことば』p148）

「院長の心得」と呼ばれる、ドン・ボスコがサレジオ会施設の院長（校長）たちのために書いた覚書の中の言葉。若くして修道院長になるルア神父に贈ったアドバイスが元となっている。ドン・ボスコの信仰が感じられる言葉。

う　うそつきは　いつわり王の子　悪魔の子
（『ドン・ボスコのことば 100』p70-71）

ドン・ボスコは子どもたちが正直な子に育つことを願っていた。嘘をつくことは、「偽の王」である悪魔の子どもになってしまうことだと教え、子どもたちが正直であることを習慣づけるよう勧めていた。

え　笑顔から　悪魔スタコラ　にげていく
（『ドン・ボスコのことば 100』p16-17、Memorie Biografiche 10, p648）

ドン・ボスコは喜びや笑顔であることを大切にしていた。悲しい顔をしている聖人はいない。神さまから愛されていることで、喜びがあふれてくるのがドン・ボスコの子どもたち。それは悪魔がとてもいやがる状態でもある。

お　オラトリオ「アヴェ・マリア」から　始まった
（『完訳ドン・ボスコ伝』p151）

ドン・ボスコのオラトリオは教会の香部屋で出会ったバルトロメオ・ガレッリという十字の切り方も知らない少年と一緒に「アヴェ・マリアの祈り」を唱えることから始まった。この後加わった左官の少年たちは、その後 3、40 年あまりもドン・ボスコと共に過ごした。

か　母さんの　名前はマンマ・マルゲリータ
（『完訳ドン・ボスコ伝』p25）

ドン・ボスコの母マンマ・マルゲリータは本名マルゲリータ・オッキエナ、父フランチェスコとは再婚で、一番上の息子アントニオは夫の連れ子だった。ドン・ボスコが 2 歳になる前に父が亡くなり、マルゲリータは一人で、貧しくも信仰深く三人の息子を育てた。

き　君たちの　ために使うよ　この命
（『ドン・ボスコのことば 100』p30-31、『完訳ドン・ボスコ伝』p201）

31 歳のドン・ボスコは重病のため命を落としかけていた。オラトリオに通う少年たちはそれぞれ多くの犠牲をし、祈り、ドン・ボスコを助けてくれるよう神さまに願っていた。願いが聞き届けられ回復したドン・ボスコは聖堂で少年たちと祈り、みんなにこの誓いを伝えた。

く　グリージョは　今夜もボスコ　守ってる
（『完訳ドン・ボスコ伝』p269）

ドン・ボスコの活動を良く思わない人たちによる傷害（未遂）事件が度々あったが、グリージョはそのころ突然現れた灰色（イタリア語でグリージョ）の大きな犬のこと。忠実な番犬のようにドン・ボスコを危険から守った。その姿はまるで狼のようだったという。

け　謙遜で　強く、たくましく　なりなさい
（『ドン・ボスコのことば 100』p138-139、『完訳ドン・ボスコ伝』p23）

ドン・ボスコが見た 9 歳の時の夢に出てくる輝くマントを着た女の方（扶助者聖マリア）が言った言葉。将来ドン・ボスコが行う事業を予見し、気が短く腕白な少年を青少年の父へと導いた。

こ　子どもらに　伝わるように　愛しなさい
（『ドン・ボスコのことば 100』p198-199、『完訳ドン・ボスコ伝』p318）

ドン・ボスコがトリノにいるサレジオ会員とオラトリオの少年たちに送った「ローマからの手紙」の中で自分が見た夢に出てくる青年のブッゼッティが言った言葉。「愛するだけではなく、子どもたちが愛されていると感じるように」というメッセージ。

さ　さあ行こう　愛の行い　しに行こう
（『ドン・ボスコのことば 100』p36-37、『完訳ドン・ボスコ伝』p45）

少年時代のジョヴァンニ・ボスコの家庭はとても貧しかった。8、9 歳の頃には農業を手伝い一日中働いていた。しかしそんな生活の中でも母マルゲリータは、近所の家で重病人が出て看病の手伝いを頼まれても断りもせず、息子を一人起こして出かけたのだった。

し　幸せは　小さな努め　果たすこと
（Memorie Biografiche 7, p19）

ドメニコ・サヴィオの言葉。身体の弱かったドメニコは、健康を気遣うドン・ボスコの勧めに従い、身体に負担をかける苦行などではなく、日々の小さな勤めを神さまへの愛のために行っていた。行うことが日常のどんな小さなことでも神さまは喜んでくれるのだ。

す　捨てなさい　我は我はと　いう心
（『ドン・ボスコのことば 100』p146-147、『若者を育てるドン・ボスコのことば』p151）

特に上に立つ人に向けたドン・ボスコの言葉。人の上に立つことは、自分の望みや欲を叶えることではなく、常に神さまと他の人が喜ぶために生きることだとドン・ボスコは教えている。

せ　聖人に　なること神さま　望んでる
（『ドン・ボスコのことば 100』p32-33）

ドン・ボスコが若者たちに言っていた言葉。どんな人でも聖人になるように神様から招かれている。若者は若者らしく聖人になれるんだよ、という教え。

そ　空の星　いったいだれが　造ったの
（『ドン・ボスコのことば 100』p96-97、『完訳ドン・ボスコ伝』p35）

ドン・ボスコの母、マルゲリータの口癖に「神さまはお前を見ておられる」という言葉がある。神さまの存在を感じ、信頼する姿は子どもたちの見本となった。そして美しい夜空を指して「世界を造り、空にたくさんの星を置かれたのは神さまですよ」と子どもたちに語った。

た　大変だ　栗がもうすぐ　なくなるぞ
（『完訳ドン・ボスコ伝』p258）

ジュゼッペ・ブッゼッティがドン・ボスコについて語った不思議な話。ある日、ドン・ボスコがオラトリオの子どもたちに焼き栗をごちそうすると約束したが、用意していた焼栗が全然足りない。しかし足りないはずの栗が結局、全員の手のひら一杯に配ることができたのだった。

ん

ドン・ボスコ 8・16（はちいちろく）が 誕生日（たんじょうび）

キリトリ

ドン・ボスコかるたについて

【作り方】

用意するもの：
- A4 または B4 厚めの紙 13 枚
- 印刷：カラー
- 読み札：46 枚
- 取り札：46 枚
- 解説 3 枚

PDF のデータをダウンロードして、白い厚紙用紙に印刷してください。点線に沿って切り取ってご使用ください。

【遊び方】

読み手：1人
取り手：2人以上

1. 読み札（文章が書いてあるもの）を束にしてよく切り、取り札（絵が描いてあるもの）を机や床などに重ならないように広げて並べてください。

2. 最初にじゃんけんなどで読み手を決め、読み札を束の上から順番にゆっくりと読み上げます。取り手は「はい!」と元気な声を出しながら、対応する取り札を片手で素早く押さえます。数人が同時に押さえた場合は、取り札を場に戻し、読み札を束の中に戻します。

3. 読み札を読み終わった後、読み手は解説を読み上げ、札の意味を伝えて参加者を感心させましょう。

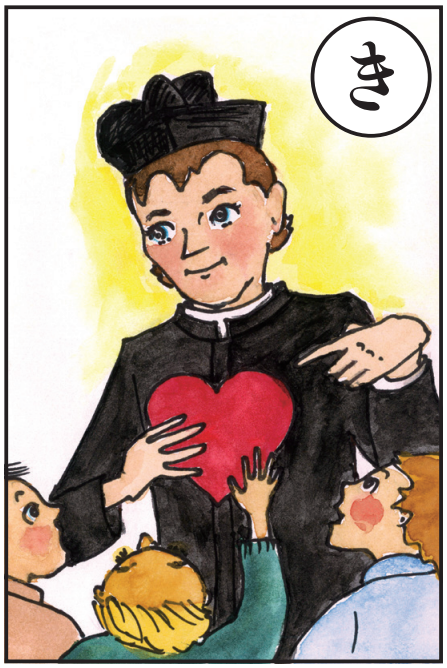
4. 読み札を全て読み終わったときに取り札を一番多く持っている人のドン・ボスコ愛の深さをみんなで喜びましょう。

5. 2人対戦の3回戦1本や総当たり戦、リーグ戦などで団体でも楽しめます。みんなでお互いにドン・ボスコ愛の深さを喜び合いましょう。

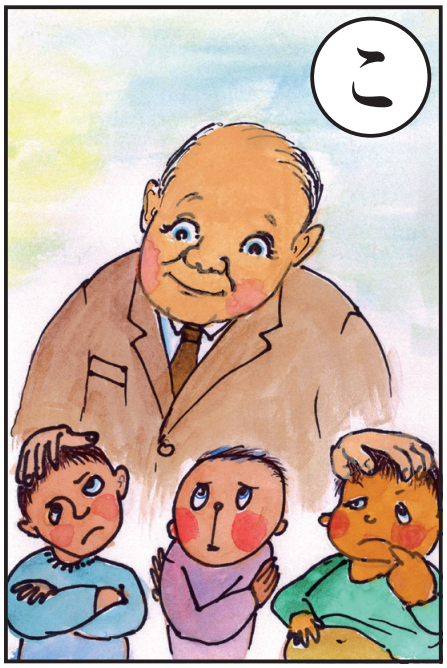
【注意】

※夢中になりすぎて、けんかや言い争い、嫌みなどを言うのはやめて、仲良く遊びましょう。ドン・ボスコが悲しみます。
※順位を競うものではありません。愛の深さを競いましょう。最後まで喜びをもって遊びましょう。

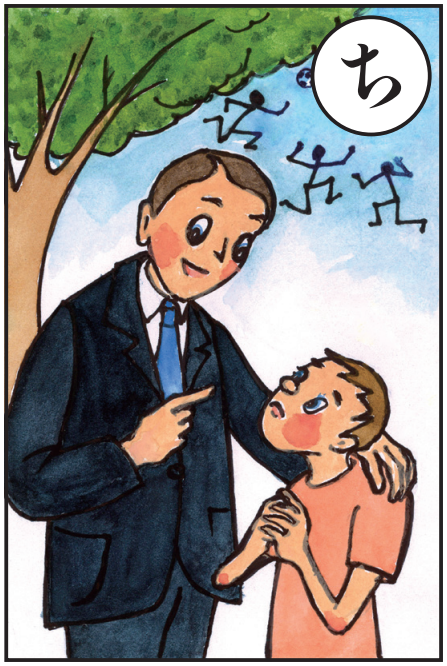
企画・制作／サレジオ家族

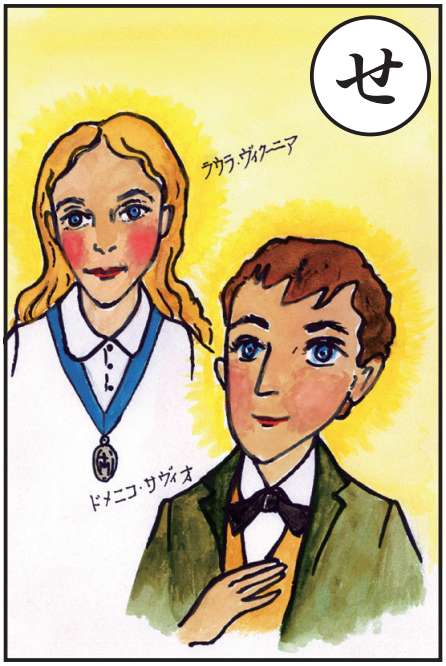


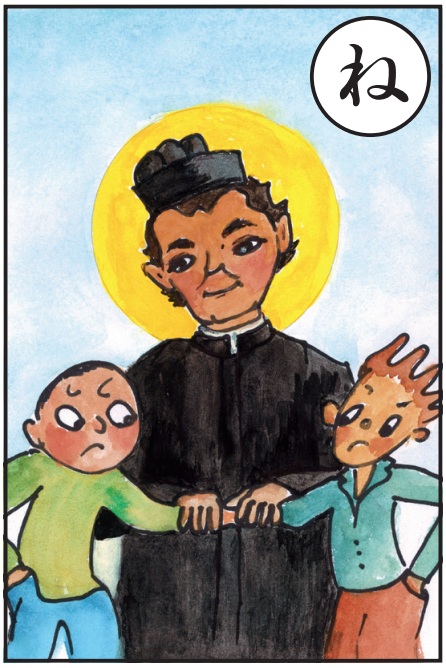
キリトリ

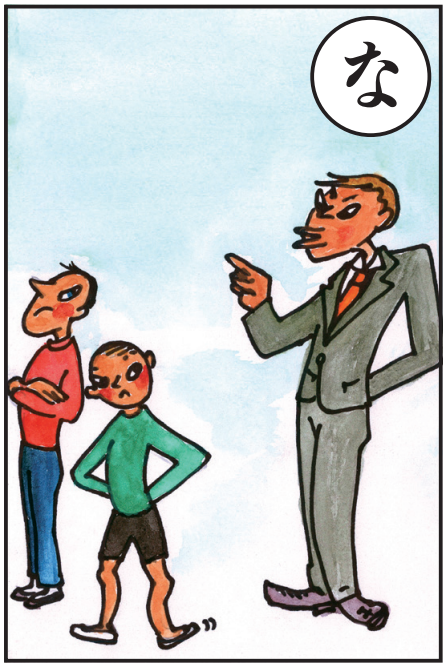


キリトリ

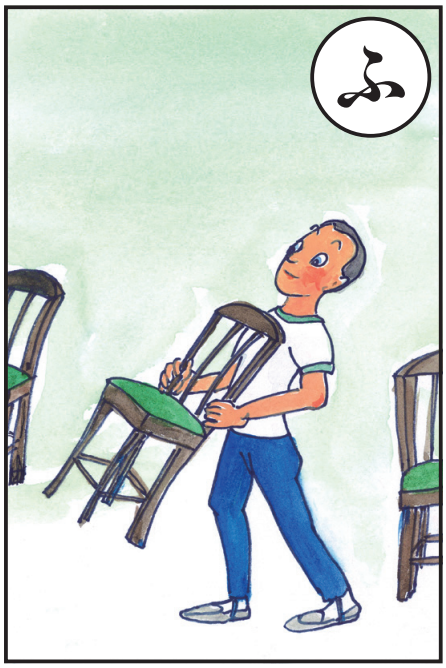




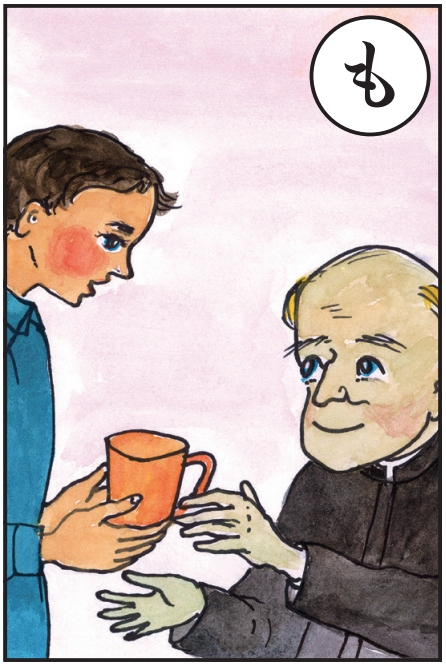


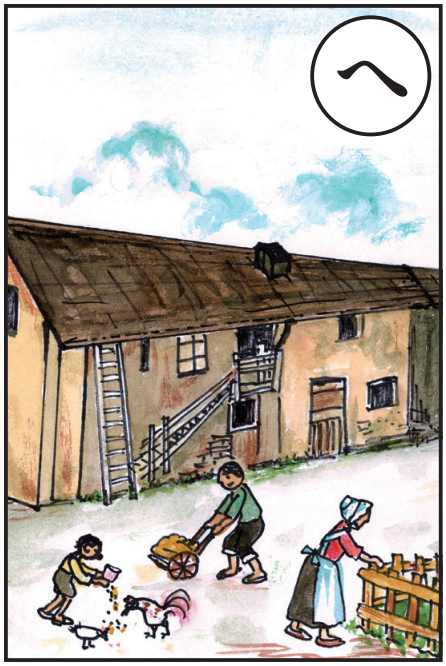


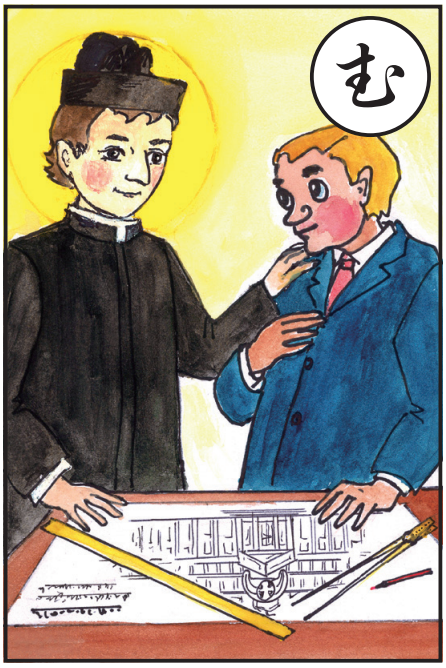
キリトリ



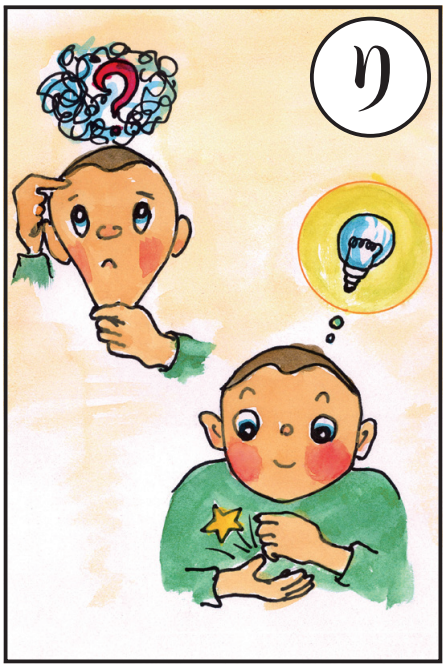
キリトリ

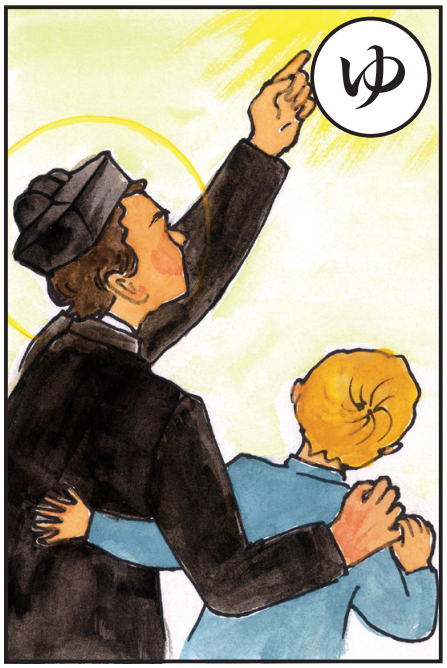






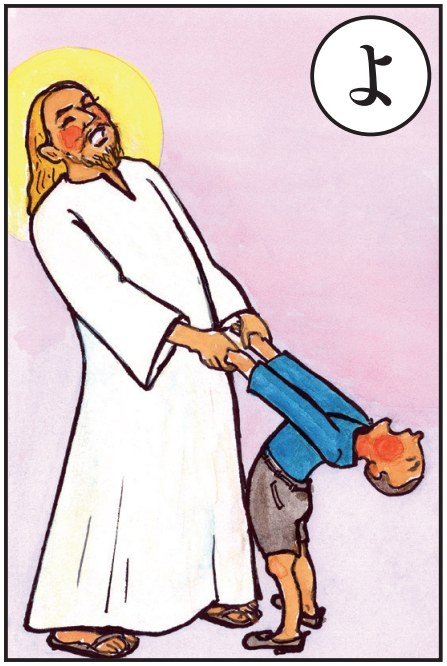
ろ


り

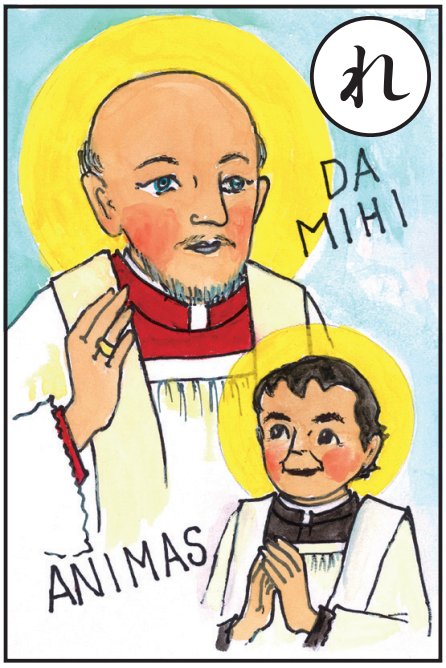

ゆ

わ

る


よ

を


れ
DA
MIHI
ANIMAS

ら

ドン・ボスコかるた　解説 2

ち　**忠告は　皆の前では　しないよう**
（『ドン・ボスコのことば 100』p52-53、『完訳ドン・ボスコ伝』p316）

ドン・ボスコは人の心の動きをよくわかっていた。人前で恥をかかせるように注意することは逆効果であるばかりか、先生への恨みさえ生み出すものだから気をつけなくてはいけない、という教え。直接、心をこめて話しかけるのだ。

つ　**綱渡り　マジックみんなで　見においで**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p54）

ドン・ボスコは 11 歳の頃すでに手品や綱渡りなどを身につけていた。それを見に来た見物客に見返りとして、最後の芸の前にロザリオを唱えることを求めた。見世物自体が目的ではなく、それを使って信仰を伝えたいというドン・ボスコの思いがわかる。

て　**天国で　一人ひとりを　待ってます**
（『ドン・ボスコのことば 100』p204-205、『完訳ドン・ボスコ伝』p525）

ドン・ボスコ 72 歳、帰天が迫る最期の数日間の中で、サレジオ会員やオラトリオの子どもたちのことを思い、話した言葉。その 3、4 日後に帰天した。

と　**飛び跳ねて　はしゃいで　友情深めます**
（『ドン・ボスコのことば 100』p08-09、『完訳ドン・ボスコ伝』p160）

ドン・ボスコは 16 歳の時、学校の友だちと付き合う中で「喜びの会」というグループを作り、楽しくも健全な友情を深めていった。その会の簡単な会則の中に、罪を避け、喜びと快活さを持って過ごすことがよい友情を結ぶために必要なものとして書かれている。

な　**何になる　口先だけの　説教は**
（『ドン・ボスコのことば 100』p154-155）

先生や神父というものは、立派な考えや教えを人には語るが、自分自身の行動が伴わないなら全く逆効果だということをドン・ボスコは強調していた。言葉よりも行動をもって人を導きなさいという教え。

に　**ニエンテ・ティ・トゥルビ　心配ない**
（『ドン・ボスコのことば 100』p94）

「ニエンテ・ティ・トゥルビ」はラテン語で「何も心配いらないよ」の意味。神さまにおまかせしていれば何も心配ないんだよ、ということをドン・ボスコは強調していた。

ぬ　**盗むかと　心配しないで　信じよう**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p216）

ドン・ボスコと母マルゲリータはある日、びしょ濡れの少年を家に迎え入れた。少年は言った。「泊めてもらえませんか?」以前に別の若者たちを泊めて、毛布を盗まれたことがあったので、マルゲリータは心配したが、最終的に少年たちを泊めた。

ね　**ねたまない　うらみもしません　ゆるしましょう**
（『ドン・ボスコのことば 100』p128-129、p130-131、『完訳ドン・ボスコ伝』p160）

サレジオ会初の宣教師団を南米アルゼンチンに派遣する際、ドン・ボスコが宣教師たちに渡した「20 の心得」の 13 番目。この後に「一人の善が皆の善となるように。一人の苦しみが皆にとっても痛みや苦しみとみなされるように」と、どんなことでも分かち合い、助け合う必要性を述べている。

の　**野原行く　もどるよ必ず　少年院**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p311）

トリノのジェネララ少年院に通っていたドン・ボスコは、服役する若者たちの真面目な態度に触れ、特別なことはできないかと遠足を企画した。監視を付けず丸 1 日囚人を連れ出すことに内務大臣も渋々承諾し、ドン・ボスコは一人で若者たちを引率し、全員無事に戻ってきた。

は　**話そうよ　ほらもうすぐに　友達さ**
（『ドン・ボスコのことば 100』p122-123）

ドン・ボスコは会話の達人でもあった。彼と話す人は、そのやさしさや思いやりに魅了されてしまうのだった。自分と話す人の考え方が違っても、友達になれるように、という教え。

ひ　**ひとりじゃない　イエスがいつも　そばにいる**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p34、Memorie Biografiche 11, p363）

ドン・ボスコは言っている。皆から見捨てられるように感じるときがあっても、決して君は一人ではない。なぜならイエスさまがいつも君のそばにいるから。誰かに見守られているという安心感は、ドン・ボスコの幼少期にマンマ・マルゲリータから受けた宗教教育がもとにある。

ふ　**ファッチョ・イオ　わたしがやります　今すぐに**
（『ドン・ボスコのことば 100』p26-27）

「ファッチョ・イオ」はイタリア語で「私がやります」の意味。サレジオ会に伝統的に伝わる言葉。嫌なことでも自ら進んでやるというサレジオ会の精神を表している。

へ　**ベッキ村　ジョヴァンニ・ボスコの　生まれ故郷**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p26）

イタリア統一前のサルデーニャ王国ピエモンテ州カステルヌオヴォ・ダスティ市のモリアルド村に属する村落の一つ。ぶどう畑と森の広がる丘の上の地域。ボスコ家はここで農業を営んでいた。現在のイタリア北部ピエモンテ州カステルヌオヴォ・ドン・ボスコ。

ほ　**ボナノッテ　短い話を　寝る前に**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p217）

「ボナ・ノッテ」はイタリア語でおやすみの意味。サレジオ会教育の伝統の一つで、サレジオ会の教育施設の長上が子どもたちに寝る前に語って聞かせる短い話のこと。マンマ・マルゲリータが泊まりに来た子どもたちに短い訓話をしていたことから始まったとも言われている。

ま　**マザレロと　一緒に作った　FMA**（サレジアン・シスターズ）
（『完訳ドン・ボスコ伝』p397）

モルネーゼ村で働いていたサレジオ会員のペスタリーノ神父が無原罪のマリアの信心会の会員だったマリア・ドメニカ・マザレロを中心にドン・ボスコの指示で発足させた女子修道会。初期の頃、周囲の無理解や貧しさに悩まされたが、今では世界中に広がっている。

み　**ミケーレ・ルア　僕たち二人で　半分こ**
（『完訳ドン・ボスコ伝』p177）

父親を亡くした 8 歳の少年ミケーレ・ルアがオラトリオでドン・ボスコにかけられた言葉。メダイをもらえずにいたミケーレ少年にドン・ボスコはこの言葉を言いながら手のひらの上で何かを半分に切るしぐさをした。この少年がドン・ボスコの最初の後継者となった。

キリトリ

ドン・ボスコかるた　解説 3

む　無理にとは　言わないけれど　ぜひ君に
（『ドン・ボスコのことば 100』p144-145、『若者を育てるドン・ボスコのことば』p150）

ドン・ボスコは人に頼むときも人の心をよく考えていた。頼まれた人が意気に感じるよう頼んでいたのだ。ドン・ボスコがその人への信頼を表す言葉でもあったのだろう。

め　メモしよう　失敗のりこえ　学ぶため
（『ドン・ボスコのことば 100』p48-49、『若者を育てるドン・ボスコのことば』p144）

ドン・ボスコによる先生たちへの勧めの一つ。経験（失敗や問題点などあらゆること）をメモに残して、それをときどき読み返し、参考にすることで先生としてより成長していけるという教え。

も　モリアルド　カロッソ神父と　過ごした地
（『完訳ドン・ボスコ伝』p26, 66）

ドン・ボスコの生まれたベッキ村が属する地域。カロッソ神父がこの地にきて少年ジョヴァンニ・ボスコに出会ったとき 70 歳だった。後にドン・ボスコは父親のように信頼したこの老司祭のもとで学び、過ごした短い日々について「この上なく幸せだった。」と語っている。

や　約束するよ　パンと仕事と　天国を
（『ドン・ボスコのことば 100』p106-107、『完訳ドン・ボスコ伝』p297）

ドン・ボスコが、小学校教師をしていたアラソナッティ神父にトリノのオラトリオを手伝って欲しいと頼み、「給料はどれくらいくれるんだい？」と聞かれたときに答えた言葉。最初はからかい半分だったが、アラソナッティ神父は「天国を手に入れたいんだ」と言ってドン・ボスコの元で生涯働いた。

ゆ　勇気出せ　希望が君に　味方する
（Memorie Biografiche 12, p458）

ドン・ボスコはどんなに苦しくて希望が見えないときにも希望を失わない人だった。それは神さまが働いてくれることを信じていたから。勇気を出して信じよう、と言う言葉。

よ　よろこびは　神と仲良く　いればこそ
（『ドン・ボスコのことば 100』p14-15、p134-135、『完訳ドン・ボスコ伝』p346）

ドン・ボスコがミケーレ・マゴーネにゆるしの秘跡の後にかけた言葉。ドン・ボスコは大人にも子どもにもゆるしの秘跡を大いに勧めていた。それは神に自分の罪を告白し、ゆるされることで、自分の心に本当の平和が訪れることを確信していたからだ。

ら　乱暴な子は　やさしさで　子羊に
（『ドン・ボスコのことば 100』p158-159、『完訳ドン・ボスコ伝』p22）

ドン・ボスコが 9 歳のときに見た夢で、下品で乱暴な子どもたちを拳や怒りの言葉で黙らせようとしたとき、イエスと思われる「気高い方」に「柔和と愛をもって」接するように諭され、子どもたちが猛獣に、猛獣たちが子羊にかわる姿を示された場面。

り　理解して　納得してから　行動に
（『若者を育てるドン・ボスコのことば』p26）

ドン・ボスコは自身の教育法の中で、「道理と信仰」の大切さを教えている。理由も伝えずに規則を強制・強要するのではなく、相手がその正しい理由と筋道を理解し、納得して自ら行動できるように導くことで始めて、強く健全な人格を育てることができると教えている。

る　ルビーより　輝く衣を　着た婦人
（『こころの教育者ドン・ボスコの「ローマからの手紙」』p48-49）

婦人とは、ドン・ボスコが 9 歳のときに見た夢に現れた扶助者聖マリアのこと。赤い服は神の慈愛、青いマントは信仰を表していると言われている。ドン・ボスコは生涯を通して扶助者聖マリアに祈り、信頼し、導きを求め続けた。

れ　霊魂を　与えてよ　ほかは取り去って
（『ドン・ボスコのことば 100』p76-77、『完訳ドン・ボスコ伝』p69）

ドン・ボスコが司祭になるときにモットーとして選んだ聖書の中の言葉。ドン・ボスコはこれを自らの模範としていた聖フランシスコ・サレジオから学んだ。原文は Da mihi animas caetera tolle（ラテン語）。

ろ　ローマから　愛する子らに　手紙出す
（『こころの教育者ドン・ボスコの「ローマからの手紙」』p04-05）

ドン・ボスコ 69 歳の頃、イタリア・ローマに長く滞在していたとき、イタリア・トリノのオラトリオのサレジオ会員、先生、子どもたちに向けて書かれた手紙。ドン・ボスコが見た不思議な夢を語る形でドン・ボスコの教育法についてのメッセージが書かれている。

わ　若者よ　心の底から　愛します
（『若者を育てるドン・ボスコのことば』p210）

この言葉は、サレジオ会の会憲の中に書かれている。ドン・ボスコは若者のために生き、命をささげた。神さまが彼に与えた若者に対する特別な愛情から生まれていた。そしてそれは、現代のサレジオ会員の生き方の源泉でもある。

を　ロザリオを　教えてくれた　おかあさん
（『完訳ドン・ボスコ伝』p47）

マンマ・マルゲリータは毎朝晩、息子たちと一緒に祈りをし、ロザリオ（バラの花冠の意。聖マリアに捧げる祈りのこと）を唱えた。そして暗記していた聖書の内容や教会要理を子どもたちに教え、聖マリアがいつも見守り、祈りを聞いてくださることを少年ジョヴァンニに教えた。

ん　ドン・ボスコ　8（はち）．16（いちろく）が　誕生日

ドン・ボスコが生まれたのは 1815 年 8 月 16 日。貧しく混乱した時代だった。母はマルゲリータ・オッキエナ・カプリリオ、父はフランチェスコ。この小さな農家には他にフランチェスコの母、フランチェスコの連れ子のアントニオ、二人の子ジュゼッペが共に暮らしていた。

キリトリ